

国際バカロレアのプログラムにみる幼小連携の可能性

— 幼小一貫校のPYP 認定校の事例から —

Possibility of Cooperation between Kindergartens and Elementary Schools Examined
from the International Baccalaureate Program:
A Case Study of PYP Schools Combined Kindergarten and Elementary School

本 多 舞
HONDA, Mai

キーワード：幼小連携、国際バカロレア、PYP プログラム、教師間交流

1 はじめに

近年、小学校に入学したばかりの児童たちが黙って静かに授業が受けられない、集団行動がとれない、授業中に立ち歩きする、といった原因から教師が授業を正常に進められない状況に陥る「小1 プロブレム」が教育課題となっている。この背景として、家庭でのしつけや発達段階の問題以外に、就学前教育と小学校教育の教育環境の違いが要因の一つとして考えられる。

2017年3月に告示された幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下10の姿）」が明示され、小学校教育との繋がりを意識した目標が明記された。また、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うこと」といった、幼児一人一人の特性を理解した上で幼児の主体的な活動が担保されるような教育環境を構築する重要性について記されている。

一方、2017年3月に告示された小学校学習指導要領では、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること」が目指されている。総則の中では、学校段階等間の接続について10の姿を踏まえた指導や、生活科等の学習で幼児期の教育との円滑な接続が図られるよう工夫することが明記されている。しかしながら、幼稚園教育要領と学習指導要領共に子どもたち

の主体性を育むことが目指されているにも関わらず、まだ小学校の学習環境が主に一斉授業となっており、一定の科目のみ幼児期の学びとの接続を図っている現状がある。このような教育環境の違いや幼小連携を円滑にする教育方針が具体的に示されていないことが、就学前教育から小学校教育への円滑な移行を困難にし、小1 プロブレムを引き起こす一因であると予想される。

そこで本稿では、幼小共通のプログラムを採用している国際バカロレア認定校における幼小一貫校の事例を通して、幼小連携の可能性について検討することを目的とする。

2 日本の幼小連携の現状と課題

子どもたちが小学校生活に戸惑う要因は、就学前教育施設と小学校の教育内容、方法、環境設定、評価方法などが大きく異なることに起因している。2011年3月に文部科学省から出された「平成20年度幼児教育実態調査」によれば、全国の公私立幼稚園及び都道府県・市町村への調査結果から「幼稚園の幼児と小学校の児童のみ交流」しているのは全体の55.6%、「幼稚園と小学校の教師が意見交換等の交流を行う」と回答したのは54.6%だったが、「幼稚園と小学校が教育課程の編成について連携」しているのは16.1%に留まった。幼小の子どもや教師が交流したり話し合う機会は全体の約半数で実践されているが、幼小連携のための教育課程を考慮・計画している事例は全国の20%にも満たない。

このような調査結果や幼小連携の課題を改善するため、2015年2月に文部科学省から「スタートカリキュラム スタートブック」が出された。この中で、スタートカリキュラムとは「小学校へ入学した子どもが、幼稚

表1 幼保小の架け橋プログラムに必要な共通理解の項目

【子どもの学びや生活に関すること】

- ・架け橋期を通じて育みたい資質・能力
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
- ・特別な配慮を必要とする子どもを含む全ての子どものウェルビーイングへの配慮
- ・子どもの学びにおける先生や大人の役割

【プログラムの実施に関すること】

- ・幼保小の連携・接続により主体的・対話的で深い学びを実現すること
- ・設置者・施設類型・学校種を超えた対話、協働、発信を行うこと
- ・実質的な話し合いや実践を重視すること
- ・ICTやオンライン等の活用による負担軽減や時間の効率的使用を図ること
- ・持続的・発展的な取組とすること
- ・形式的な取組とならないよう、子どもの姿を起点とした取組を推進すること

文部科学省（2023）より引用し筆者作成

園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を作り出していくためのカリキュラム」と定義されている。小学校生活の中で幼児期に親しんだ教師や友達と関わる活動を取り入れ、分かりやすく学びやすい環境づくりを設定することで、子どもたちが安心して小学校生活を送ることができる。スタートブックでは、小学校の教師は生活科を中心とした科目や学校生活の中で、幼児期に経験した活動や教育環境を意図的に設定することを促進している。しかしながら、大藏（2024）は幼児期の学びが生活科に繋がりがあことは示されているものの、具体的に両者をどのように繋いでいくのか明確に述べられていないと指摘している。

また、就学前教育施設においては「就学前の幼児が円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにするとともに、幼児期の学びが小学校の生活や学習で生かされて繋がるよう工夫された5歳児のカリキュラム」と定義されるアプローチカリキュラムの実践が推進された。その後、2023年2月に文部科学省から出された「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実（以下幼保小の架け橋プログラム）」では、小学校によるスタートカリキュラムと就学前教育施設によるアプローチカリキュラムが相互に機能することが推進されている。就学前教育施設と小学校が協働し、共有する視点をもって教育課程や指導計画を計画・実施できるよう、架け橋期のカリキュラムを作成することが重要であると記されている。幼保小架け橋プログラムでは、目指す方向性として子どもの発達の段階を見通した架け橋期の教育の充実や、架け橋期のカリキュラムの作成及び評価の工夫によるPDCAサイクルの確立をあげている。そして、架け橋期の教育の質保障のために人材育成や園長及び校長等を

対象とした研修、地域を巻き込んだプログラムの推進などの重要性が述べられ、関係者の中で上記の項目について共通理解を図りながら進めていくことが望まれている（表1参照）。

人材育成については、幼児教育アドバイザーや架け橋期のコーディネーター育成が急務とされている。幼児教育アドバイザーとは「幼児教育の専門的な知見や豊富な実践経験を有し、域内の幼児教育施設等を巡回、教育内容や指導方法、環境の改善等について指導を行う者のこと」（杉村ら 2021: 15）であるが、架け橋期のコーディネーターについては特に定義されていない。幼児教育アドバイザーはあくまで幼児教育の専門家であり、小学校教育に精通しているとは限らない。一前ら（2024）が指摘しているように、幼保小連携に対する指導助言を行うのは、幼児教育と小学校教育の双方に精通している人材が求められる。一前ら（2024）は、2自治体5名の幼保小連携の関係者へのインタビュー調査から架け橋期のコーディネーターに求められる資質を分析した結果、主に①取り組みを発信する力、②担い手としての自覚を促す力、③意味や枠組みを見出す力、の3つを持ち合わせた人材が求められていることを明らかにしている。

一方、教師間の接続については山形県内の教育委員会が開催した幼保小連携研修会の分析を行った奥山（2019）の研究から、接続期のカリキュラム作りをするためには幼児期から児童期にかけての発達の理解を深めて情報共有することが課題であると述べている。また、教師が普段の保育や教育において主体的・対話的で深い学びとなるよう意識する必要がある、「思考力・判断力・表現力（の基礎）」の視点を意識することの重要性をあげている。

さらに、カリキュラムに関して池田ら（2021）は、幼保小連携に関する教育活動の成果を検証した研究が少な

く、現場による主体的な取り組みが多いため課題が山積していると述べている。高橋・加納（2024）も、スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムを一体に捉え、保育者と小学校の教師が協働してカリキュラムを作成・実践している事例が少ないことに鑑み、接続カリキュラムが就学前教育と小学校教育双方に有意義な学びになっていないことを指摘している。

このように、幼小小連携については課題が山積している。次節では、幼小共通のプログラムを展開している国際バカロレアのカリキュラムを導入している幼小一貫校の事例を紹介し、幼小小連携カリキュラムや教師の研修について検討する。

3 国際バカロレアのPYPについて

国際バカロレアは、1968年にスイスのジュネーブで創設された国際バカロレア機構が提供するプログラムで、3～19歳までを対象とした4つのプログラムで構成されている。国際バカロレアの学びは、全人教育や概念学習に基づいた探究学習となっており、以下の「国際バカロレアの使命」を教育理念としている。

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。

国際バカロレア機構（2018）より引用

また、目標とする学習者像として「探究する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念をもつ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスのとれた人、振り返りができる人」の10項目をあげている。これは国際バカロレアを学ぶすべての学習者が目指す人物像のため、国際バカロレア認定校すべての教室に学校の個性に合わせた形で提示されている。国際バカロレア認定校の教師は、①探究を基盤とした指導、②概念理解に重点を置いた指導、③地域的な文

脈とグローバルな文脈において展開される授業、④効果的なチームワークと協働を重視する指導、⑤学習への弊害を取り除くデザイン、⑥評価を重視する指導（山内2022）を意識した指導方法が求められている。

本稿で研究対象とするPYP（Primary Years Programme）は、1997年に開始された3～12歳を対象としたプログラムで、日本では年少～小学校6年生が対象となる。精神と身体の両方を発達させることを重視しており、就学前教育段階と小学校教育段階のプログラムを一貫することで幼児期から探究学習や国際的な視野を育むことを目的としている。国際バカロレア機構（2018）によれば、幼児期は身体的・社会的・情緒的・知的・美的分野における成長が著しいため、国際バカロレアではこの時期における学びが重要であり、PYPは幼児期における経験が将来のすべての学習の基礎となる。また、Voice（自ら声を発する）・Choice（選択を行う）・Ownership（主体性）を発揮することで形成されるエンジェンシーを重視し、幼児期の子どもや小学生が活動に責任を持ち、主体性を発揮し、他者との協働を通して他人の意見や価値観を認識することを目標としている。

PYPのカリキュラムは、「私たちは何を学びたいのか（指導計画）」「私たちはどうしたらより良く学べるか（授業方法）」「私たちはどのようにして何を学んだかを知るのか（評価計画）」の3つを柱とした学びとなっている。PYP認定校では、日々の活動や学習指導要領に沿った教科学習（一条校の場合）の他に、教科の枠を超えて子どもたちの周囲で直面している課題をテーマとした以下の「6つの教科の枠をこえたテーマ」に関する探究学習を行うことが特徴の一つとなっている。

表2 PYPの教科の枠をこえたテーマ

私たちは誰なのか 私たちはどのような時代と場所にいるのか 私たちはどのように自分を表現するのか 世界はどのような仕組みになっているのか 私たちは自分たちをどう組織しているのか この地球を共有すること
--

国際バカロレア機構（2018: 14-15）より引用

上記であげた6つのテーマのうち、就学前教育では毎年4つ、小学校では6つすべてのテーマを取り扱うことになっており、1つのテーマに関して数週間～数ヶ月かけて取り組み、教科横断的かつ継続的な探究学習を通して学びを深めていく。この学習は決まった正解がないため、正解か否かを考えるのではなく、自分の考えに理由があることや他人の意見を聞くことで思考を深めることを重視している。PYPでは、この探究学習のことを「探

究プログラム：Program of Inquiry（以下 POI）」とし、日々の子どもたちの様子から興味・関心、疑問や知りたいと思うことを教師が汲み取り、それを子どもたちの発達段階に合わせた POI に発展させる。

POI は、①教科の枠をこえたテーマ、②セントラルアイデア、③重要概念、④関連概念、⑤探究の流れ、⑥学習のアプローチ／スキル、⑦学習者像、の7項目について考慮しながら計画していくよう国際バカロレア機構で定められており、幼稚園も小学校も同様である。セントラルアイデアとは、選択した教科の枠をこえたテーマに関わる探究学習を行うにあたり、考え方の核となる部分のことである。例えば、教科の枠をこえたテーマが「地球を共有すること」ということなら「私たちには身の回りの物を大切に扱う責任がある」、「私たちはどのような場所と時代にいるのか」なら「暮らしは時代に合わせて変わる」などがセントラルアイデアの一例である。つまり、教科の枠を超えたテーマを自分たちの生活や現状に当てはめながら、テーマの核心（概念）を具現化したものがセントラルアイデアとなる。

重要概念とは、行う探究学習をどの角度から深掘りするかを決めるレンズのような役割で、PYP では「特徴、機能、原因、変化、関連、視点、責任」の7つに定められている。関連概念は重要概念をさらに細分化・具現化したもので、扱うテーマに合わせて教師が考える。例えば重要概念を特徴とした場合、関連概念は構造、類似点、相違点、傾向、特性などがあげられ、機能を選んだ場合はパターン、役割、システムなどが関連概念となる。また、学習のアプローチ／スキルは「思考スキル、リサーチスキル、コミュニケーションスキル、社会的スキル、自己管理スキル」の5つから教師がテーマに合わせて選択する。このように7項目を踏まえながら表3のように POI を計画していく。

4 PYP 認定校における幼小連携

本節では、幼小一貫校の PYP 認定校における幼小連携の事例を紹介する。対象となる学校が2022年に出版した PYP に関する書物および2019年9月9日、2024年11月2日（S 幼稚園及び小学校）と2019年11月5日、2021年7月13日（Y 幼稚園及び小学校）に実施した園長及び校長、PYP コーディネーターへの聞き取り調査を踏まえ、幼小連携の事例を明らかにする。なお、聞き取り調査の対象者には本研究に調査内容が掲載されることを説明し、承諾書を得ている。

2024年6月現在、国内の PYP 認定校は65校、候補校は48校あるが、このうち一条校の PYP 認定校は19校となっている。近年、幼小一貫の PYP 認定校となっている学校も出てきている。本稿で調査対象としたのは2校の幼小一貫校である。

4-1 Y 校の事例

Y 校は山梨県の私立校で、幼稚園から大学までの一貫校となっている。幼稚園は「子どもを人として尊ぶ・生活の中で育てる」を教育理念とし、「遊びの中で智を育む・遊びの中で心を育む・遊びの中で体を育む」、小学校は「自律、思考、表現、共生」を教育目標としている。幼稚園・小学校共に2019年2月に PYP 認定校となり、一条校における幼小9年間の PYP として全国で初めて認定された。Y 幼稚園の園長によれば、当初から幼小一貫校で同時に PYP を導入することが計画されていたため、国際バカロレア機構が主催するワークショップや研修に小学校の教師たちと共に参加し、情報共有しながら探究学習について学びを深めていった。また、幼小共同のファームがあり、キャベツなどの野菜を協働しながら育てている。

国際バカロレアを導入する際、すべての認定校にコーディネーターと呼ばれる役割を担う人材が必要で、幼稚

表3 POI の事例（上段：年少、下段：年長）

教科の枠をこえたテーマ	セントラルアイデア	重要概念	関連概念	学習の流れ	学習のアプローチ／スキル	学習者像
わたしたちは誰なのか	いろいろな人がいてみんな繋がっている	特徴 関連	特性 共感	1. 好きに気がつく 2. 自己認識 3. 他者と自分	思考スキル 社会性スキル	心を開く人 信念をもつ人 コミュニケーションができる人
私たちはどのような場所と時代にいるのか	時代の流れと共に暮らしは変化し続ける	視点 変化	時代 便利 進歩	1. 昔の生活 2. 今と昔を比較する 3. これからの生活	思考スキル リサーチスキル コミュニケーションスキル	探究する人 知識のある人 心を開く人

M 幼稚園の HP より引用し筆者作成

園・小学校の場合はPYPコーディネーターを設ける。PYPコーディネーターは、現場で授業を行う教師たちとの話し合いを通して、幼小カリキュラムの構築・再考をくり返しながらミーティングや研修を実施し、国際バカロレア機構との連携を取りながら様々な調整を行うなどの重要な役割を担う。国際バカロレア機構との共通言語は英語のため、PYPコーディネーターには高い英語力が必要となる。Y校では、幼小9年間一貫の認定校を目指していたため、PYPコーディネーターは幼小どちらの校種にも関わるよう定められている（山内 2022）。Y校では2つの校種を包含しながら一定の権限を持って教職員への指示・指導を行うため、コミュニケーション能力やリーダーシップも要求される。また、カリキュラムの計画は最も重要な仕事の一つとなるため、2校種の教育内容を理解している必要がある。

山内（2022）によれば、PYPに関わる全教職員が教室に掲示するための学習者像のデザインを持ち寄り、3歳～7歳と8歳～12歳に分けて発達段階を考慮し、話し合いを通して作成するなどの校種をこえた教師の協働を積極的に行っている。また、POIの取組に対する評価の校内研修では、保護者への理解に関する話題が出され、保護者向けのブログで探究学習の様子を紹介し、ポートフォリオなどを活用して子どもたちの評価を伝えるようにした。小学校では、探究学習の成果物や評価表を保護者に見てもらい、子どもの成長を共有するようにし、年に1回保護者向けの国際バカロレア研修会を開催している。

4-2 S校の事例

S校は静岡県にある私立校で、幼稚園から高等学校までの一貫校である。キリスト教的精神に基づいたバランスのとれた人間教育が目指され、幼稚園・小学校共に「キリストの教えを、教育の土台に」を教育目標としている。学園として小学校から独自の「4・4・4制」と国際バカロレアの学習を柱とした一貫教育となっている。2020年2月に幼稚園・小学校共にPYP認定校となり、日本ではじめて幼稚園から高等学校まで一貫の国際バカロレア認定校となった。

S校のPYPコーディネーターによれば、POIの計画や評価に関する幼小の教師合同の勉強会を定期的に行っており、例えば2024年6月に実施された勉強会では幼稚園の教師11名、小学校1～4年の教師17名（専科教員5名を含む）が参加し、概念理解をテーマに教師自身の学びを深めている。大きなテーマとして、①概念的理解を導く教師の指示・発問、②概念的理解を言語化する授業デザイン、③概念的理解を促す教師のフィードバック・フィードバック、の3項目を設定し、幼小連携チー

ムで研究を進めている。時には園児・児童へのインタビューやアンケート調査から指導改善を行うこともある。PYPコーディネーターによれば、幼小共同の勉強会を通して、なんとなく授業することがないよう授業のねらいや育みたい力を明確化することや、概念的理解を深めるための発問の工夫を教師が意識して取り組むようになった。

5 2校の事例からみる幼小連携への示唆

幼小一貫校のPYP認定校の事例から、幼小連携の課題解決を検討するための手がかりとして主に2点をあげることができる。

まず一つ目に、就学前教育と小学校教育のカリキュラム計画についてである。就学前教育と小学校教育の学びが生活科の学びと親和性があることは示されているものの、大藏（2024）が指摘している通り具体策は明示されていない。このことは、「平成20年度幼児教育実態調査」で教育課程の編成に関する幼小連携の実態が20%以下という結果からも明らかである。一方、PYPでは国際バカロレアの使命や学習者像、POIや教育課程が幼小で共通しているため、両校種の教師が目指すべき方向性が同様となっている。幼児・児童に育みたい資質・能力が共通しているため、両校種の教師が子どもの発達段階や興味・関心、学びに対する評価を共有しつつPOIを協働して作成することは、幼小連携を円滑にするための好事例といえる。

二つ目に、コーディネーターの役割である。奥山（2019）が明らかにしたように、接続期のカリキュラム作りには幼児期から児童期にかけての発達理解を情報共有する必要がある。

架け橋期のコーディネーターは就学前教育・小学校教育のどちらにも精通している人材が理想だが、現状そのような人材の確保は容易ではない。そのため、Y校のPYPコーディネーターのように幼小9年間一貫教育を見越したコーディネーターを設定し、幼小どちらの校種にも関わるような仕組みづくりは、今後架け橋期のコーディネーターを育成するにあたり、貴重な事例になると考える。また、PYPの事例であげられたように、コーディネーターにはコミュニケーション能力やリーダーシップが求められることも明らかとなった。

本稿で事例としてあげた2校は私立校かつ幼小一貫校のため、一貫校以外の就学前教育施設と小学校の関係性とは事情が異なることは否めない。しかしながら、架け橋期のコーディネーターの育成が急務であるにも関わらずその定義がなされていない点を鑑みれば、今後の幼小連携の仕組みづくり、架け橋期のコーディネーター育

成への示唆を与える事例となるだろう。

6 おわりに

本稿では、幼小一貫校の国際バカロレア認定校の事例から、幼小連携の可能性を模索するための取組について検討した。特に幼小一貫校における PYP コーディネーターの役割は、架け橋期のコーディネーターの役割に求められる資質と親和性があり、示唆を得られる結果となった。今回は2校の事例に留まり、関係資料および園長・校長への聞き取り調査に留まったが、今後も幼小一貫校の PYP コーディネーターへの聞き取り調査を重ね、架け橋期のコーディネーター育成や幼小連携カリキュラムの計画の課題解決の糸口を見つけていきたい。

【文献】

- 池田孝博・杉野寿子・大久保淳子・鷲野彰子・中原雄一・伊勢慎 (2021)「保幼小連携におけるアプローチカリキュラムに関する研究の動向と課題」『福岡県立大学人間社会学部紀要』29-2, 215-223.
- 一前春子・秋田喜代美・天野美和子 (2024)「幼保小の架け橋期のコーディネーターに求められる資質の検討」『共立女子短期大学文科紀要』67, 1-10.
- 大藏純子 (2024)「生活科を中心とした架け橋期カリキュラムの構想に向けて」『名古屋経営短期大学紀要』65, 15-31.
- 奥山優佳 (2019)「幼保小連携の実際と課題—山形県 H 市教育委員会の取り組みから—」『東北文教大学東北文教大学短期大学部教育研究』9, 99-110.
- 国際バカロレア機構 (2018)『PYP のつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み』International Baccalaureate Organization.
- 杉村伸一郎・上山瑠津子・濱田祥子・清水寿代 (2021)「幼児教育アドバイザー所感における助言の内容とタイプ」『幼年教育研究年報』43, 15-23.
- 高橋浩司・加納誠司 (2024)「幼児期の学びや育ちを生かした接続カリキュラムの研究—架け橋期における互惠性のある幼保小連携を目指して—」『愛知教育大学研究報告. 教育科学編』73, 10-19.
- 文部科学省 (2015) スタートカリキュラム スタートブック
- 文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領』フレーベル館.
- 文部科学省 (2018)『小学校学習指導要領』東洋館出版社.
- 山内紀幸編 (2022)『探究プロジェクトの最前線 国際バカロレア (PYP) の理論と実践』一藝社
- 文部科学省 (2010) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告)
- https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf

(2024年11月10日閲覧)

文部科学省 (2011) 平成20年度 幼児教育実態調査

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/05/31/1278591_01.pdf
(2024年11月10日閲覧)

文部科学省 (2023) 学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt_youji-1258019_03.pdf (2024年11月10日閲覧)